

C77

1293年永仁鎌倉地震と相模トラフ巨大地震の再来時間

石橋克彦 (建設省建築研究所国際地震工学部)

The 1293 Einin Kamakura earthquake and the recurrence time of great interplate earthquakes along the Sagami trough, central Japan

Katsuhiko ISHIBASHI

*International Institute of Seismology and Earthquake Engineering**1 Tatehara, Tsukuba, 305 Japan*

●相模トラフ北半に沿うプレート境界巨大地震の再来時間については、地殻上下変動に関する地形と測量のデータや、プレート運動、歴史地震の評価などから、何人かの人々が約200～300年という数値を出している(たとえば、瀬野, 1977; 石橋, 1977)。これに対して変動地形の研究からは、1000年オーダーの長い時間が主張されている(たとえば、松田, 1985; 山崎, 1985)。この付近のプレート相対速度、M8級地震のすべり量、1923年大正関東地震と1703年元禄関東地震の地震像と時間間隔を総合して考えると、地震すべり率が100%に近くプレート間巨大地震の再来時間が200～300年というのがきわめて自然であるが、1000年前後という説の背景には、元禄地震の前の歴史的プレート境界巨大地震が知られていないという状況もあるようである。

●しかし中世には、鎌倉の地震被害がかなり記録されている。主なものは、1241(仁治2)年、1257(正嘉元)年、1293(永仁元)年、1433(永享5)年などである。これらは従来、鎌倉付近のM7クラスの地震とされているが(たとえば、宇佐美, 1987)、最近の歴史地震学による古地震見直しの目覚ましい経験から考えると、これらのどれかがプレート境界巨大地震だった可能性は十分残されている。もちろん、そうでないかもしれないし、また既知の史料にはとどめられていない可能性もあるのだが、本報では、もし既知の鎌倉強震の中にプレート境界巨大地震を求めるとすると1293年永仁地震が有力候補だろうということを述べる。この地震は元禄地震の410年前であり、その間にもう一つプレート境界巨大地震が隠されている可能性があるが、今回は1433年永享地震を含めて14世紀以降は対象としない。

●1293年永仁鎌倉地震は、正応6年(8月に永仁と改元)4月13日(1293年5月27日)の早朝5時

頃に発生した。『増訂大日本地震史料(第一巻)』に16点、『地震・津波補遺史料』(都司, 1980)に4点、『新収日本地震史料(第一巻)』に4点、『同(補遺)』(地震研究所, 1989)に5点(うち4点は都司(1980)からの再録)の史料がある。それらによると、建長寺、寿福寺をはじめ堂舎家屋が多数倒壊し、大慈寺は埋没したという。死者は、史料により、1700余、2500余、幾千、鎌倉中1万余、23,024、関東分23,074などである。余震活動はきわめて活発だったらしい。津波を明記した史料はないが、武者(1950)は、浜辺に140の死体があったという『醍醐寺日記』の記事を津波による溺死かもしれないとしている。『実躬卿記』の地震当日の記事により、京都で有感だったと判断される[都司(1980)は、北条貞時が長崎頼綱父子を誅した事件の瑞相として大地震動があったという『保暦間記』の記事を、京都の事情だと註記し、地震研究所(1989)もこれを踏襲しているが、頼綱誅伐は鎌倉の事件だから、京都で大地震動を感じたわけではなかろう。ちなみに元禄地震の京都の震度は宇佐美(1987)によると1～2である]。また改元はこの地震のためだったという。参考にとどめるべきだが、『箱根七湯の枝折』には小田原辺でも死者があったような記述があり、平塚市根坂間の宝珠院には古寺が全壊したという伝承がある。なお、越後魚沼郡で山崩れ死者多数という『越後年代記』の記事は、この書物が1866年刊の編纂物で古い時代に関しては低級史料なので(萩原編, 1989)、無視したほうがよい。

●笠原(1985)は1241年の地震を200年毎に起こる相模湾の地震と考え、石橋(1977)は1257年の地震に注目したが、両地震とも、被害、余震活動、京都の震度の点で、現時点の史料でみるかぎり永仁地震より小規模だったようである。今後の研究の一つの指針として、1293年永仁地震が相模トラフ北半のM8級プレート境界地震である可能性を提唱する。